慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 E.ブルガーの新刊『シューマン』について
Sub Title	Book review : Robert Schumann : eine Lebenschronik in Bildern und Dokumenten. by Ernst Burger. (Mainz: Schott, 1999)
Author	徳永, 叡春(Tokunaga, Yoshiharu)
Publisher	
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 No.16 (2001. 5) ,p.82- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20010531-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

E. ブルガーの新刊『シューマン』について

Ernst Burger: Robert Schumann —— Eine Lebenschronik in Bildern und Dokumenten —— (Neue Ausgabe sämtlicher Werke. Serie Ⅷ. Supplemente; Band 1.) Mainz: Schott, 1999. 〔355 p. ISBN 37957-0343-3〕

徳　永　叡　春

これは同一編集方針による“Franz Liszt……”（ミュンヘン 1986/パリ 1988 仏訳？/ニューヨーク 1989 英訳），“Frédéric Chopin……”（ミュンヘン 1990）に続くE. ブルガー（1937年ミュンヘン生，ピアニスト兼著述家）の第3の仕事である。前2冊についてはVirginia Polytechnic Institute and State UniversityのMichael SaffleとUniversity of PennsylvaniaのJeffery Kallberg，そして今回のものについてはOberlin CollegeのClaudia Macdonaldによる書評が既にそれぞれ米国の音楽図書館協会季刊誌“Notes”に掲載されている(cf. *Notes* 47〔1991〕: pp. 1133-35, 50〔1994〕: pp. 963-64, 56〔1999〕: pp. 409-11)。

紙型，図版の割付，解説など編集法は前2冊と同じ。シューマンの全生涯は，目次では“幼少年期・1810-1829”，“ピアノ曲・音楽文筆家・1830-1839”，“結婚・歌曲・交響曲・室内楽曲・1840-1849”，“デュッセルドルフ・病気・エンデニヒ・1850-1856”と区分されているけれども，本文になると1810-1817年はまとめて，1818-1821年は一年毎に，見開頁の左端に

“Leben” 欄がもうけられ，その後は更に右端に “Werke” 欄が付加されてシューマンの全生涯中の出来事と仕事が一年一年，各種研究書からの引用文を入れながら解説されて行く。その間，各頁に割付けられている図版（絵画・版画，写真，自筆書簡・日誌，自筆楽譜，初版楽譜，演奏会プログラム，各種評論誌など）の総数は626点。ショット社によれば，そのうち105点は “初公開 Erstveröffentlichung”。

初公開の絵画・版画の中では，シューマンの次兄カール（細密画，1840年頃，s. 21），父親の親友クルラー（パステル画，1830年頃，s. 21）ツヴィッカウ近郷のシュネーベルク風景（水彩画，1845年，s. 106）が後に出て来るシューマンの自筆書簡と結び付いて印象深い。初公開以外のものは，シューマンに関する様々な書 —— Georg Eismann : Robert Schumann Eine Biographie in Wort und Bild（VEB Deutscher Verlag für Musik, Leipzig, 1964）など —— を通じて広く知られている図版も多いが，モノクロだったものがカラーになり，モノクロの古い写真も従来より高度の複写技術によっているせいか，全点が新鮮である：シューマンの生家（鋼版画，1860年頃，s. 15）やハイデルベルク大学広場での学生集会（水彩画，1804年，s. 73），エルネスティーネ・フォン・フリッケンの肖像画（油絵，1835年頃，s. 129）もカラーになって，原画はこんなものだったのか！　と見入ってしまう。ジャン・パウルが利用したバイロイトの宿屋と仕事部屋（石版画，1870年頃，s. 59），シューマンが旅行中にハイネを訪ねて快談した当時のミュンヘン市街（石版画，1828年頃，s. 61），デュッセルドルフ中央広場と1854年２月彼がライン川に身を投じた船橋前景（鋼版画，1850年頃，s. 290）なども色鮮やかである。

初公開のモノクロ写真 —— 晩年の F. ヴィーク（1870年頃，s. 69），ベルリオーズ（1867年，s. 139），タールベルク（1860年頃，s. 209），リスト（1848年頃と1852年頃，s. 260，294），F. リヒアルツ（エンデニヒの私立精神病院長，1855年頃，s. 330），成長したシューマンの娘たち（1864–70年頃，s. 341）—— は，現在のけばけばしいカラー人物写真よりはるか

に落着きと深みがあって好ましい。この様な人物写真のほか，初公開とは表示されていない写真でも，シューマンがライプチヒで最初に住んだブリュールの古い家並とアウエルバッハの街角（1900年頃，s. 70），彼が1833年から1840年にかけて夜ごと通った飲食店“Zum Kaffeebaum”全景（1940年頃，s. 128），ハイデルベルクでのアパート全景（1920年頃，s. 72），それにノートルダム大聖堂北尖塔から眺めたパリ全景（1844年頃，s. 110 f.）やデュッセルドルフの船橋（1870年頃，s. 315）は珍しい。

自筆書簡・日誌の図版はシューマン15歳の時に書かれた自叙伝“Meine Biographie oder Hauptereignißе meines Lebens.”（s. 32 f.），手書きのピアノ協奏曲第1番ホ短調を約束通り送って，その演奏を楽しみにしている旨を丁重にしたためたショパンのクララ・ヴィーク宛短信（1832/2/23日？，s. 111），自分の演奏会にクララ（？）の共演を願うベルリオーズのF. ヴィーク宛（？）書簡（1832/3/5日付，s. 112）の様な初公開のものが多いが，中でもカール・マリア・フォン・ウェーバーのF. ヴィーク宛書簡（1815/8/13日付，s. 69）は貴重！　解説によれば，これはヴィークが1815年に自作の歌曲集（全8曲）をウェーバーに送って献呈した際の返信であるが，単なる礼状ではなく，丁重な謝辞の後，歌曲集全体に見られるメロディー，形式，歌唱声部，和声，転調，抑揚を個別に取り上げた厳しい概評，それから全8曲各曲の添削とも言えるほどの個別批評が続く。シューマン自身の書簡では，前述した1828年頃のミュンヘン市街石版画とハイネの肖像画（1831）直後の図版――前述父親の親友クルラー宛のもの（1828/6/9日付，ミュンヘン滞在中のハイネとの面会報告を含む）――が，前後の図版と相まって当時のひとこまを生き生きとよみがえらせてくれる（s. 61 f.）。日誌では，19世紀の風習としてもまれな夫妻週替り分担のいわゆる“結婚生活日誌 Ehetagebuch”第1冊から第18-21，38-41，86-87頁が初公開図版になっていて有難い（s. 194 f., 198 f., 201）。そのほか自筆の図版ではないけれども，F. リヒアルツの患者日誌抜粋（シューマンの病症経過日誌，初公開，s. 323，331 f.）が注目に価す

る。残念ながらシューマン入院当初4週間と1854年4月末から9月初めの記入部分は紛失との事。それでも続いて引用されているロベルト危篤から死去に至るまでの状況とその後の心境を書き綴ったクララの日記（1856/7/23－31日，s. 332）を通読する際には，襟を正して読まざるを得ないほどの緊張感が生じる。

自筆楽譜の図版は，シューマン最初期の“Lied für xxx”（1827），晩年のいわゆる《精霊変奏曲 Geistervariationen》主題と第1変奏冒頭（1854），さらに最晩年のパガニーニ《24のカプリース》のためのピアノ伴奏譜（1853－5）第2曲第1頁（初公開）に至るまで（s. 48 f., 314, 328），その間に初公開のものが多い：指使い数字を丹念に書き込んだ音階と分散和音練習譜（1831）にはピアニストを志すシューマンの精進振りが如実に表われているし（s. 96 f., 107），その翌年には早くも未完成の交響曲ト短調フィナーレのスケッチがある（s. 114）。歌曲ではロベルト30歳の誕生日にクララに贈られ，彼女の手で“8. Juni 1840”と書き込まれている《ミルテの花》op. 25 第11曲《花嫁の歌》や，《ロマンスとバラード》op. 53 第2曲《ローレライ》（1840）が大型図版になっている（s. 197, 200）。殊にクララ作曲の歌曲“Liebeszauber”第1頁と“Sie liebten sich beide”（1842）は，彼女の几帳面な筆致が美しい（s. 217）。その他，オペラ《ゲノフェーファ》序曲及び第1幕第6曲“Recitativ und Szene”スケッチ（1847）と第2幕フィナーレ・スケッチ第1頁（1848），朗読曲“Ballade vom Haidenknaben”op. 122の1第1頁（1853）などもロベルトの繊細な筆跡が鮮やかである（s. 248, 250, 258, 306）。初公開以外のものも“7 Juni 1841.”と書き込みのある《交響曲第4番ニ短調》op. 120初稿第1頁，《ゲーテのファウストからの場面》の《神秘の合唱》（1844）第1頁と序曲（1853）第1頁，《ピアノ協奏曲イ短調》op. 54第1楽章（1841）冒頭と第2楽章から第3楽章への推移部（1845）などの大型図版は，見応えがある（s. 203, 223, 301, 235）。

初版楽譜は，多くの場合，表題頁と楽譜第1頁が図版になっている。

シューマンの有名なピアノ曲，歌曲，室内楽曲，交響曲ばかりではなく，オペラ，それにオラトリオ，ミサ曲，レクイエムなど作品番号100番台のものも多い：《ミサ曲》op. 147（1862）表題頁と“Sanctus”に続いて《レクイエム》op. 148（1864）表題頁と“Dies Irae”(s. 291)，オペラは《ゲノフェーファ序曲》(1850）とクララによるピアノ伴奏編抜粋版“GENOVEVA PER IN VIER ACTEN”（1851）の表題頁が見られる（s. 269, 259)。20曲のピアノ小品集“ALBUMBLÄTTER. op. 124”（1854）とオラトリオ“Der Rose Pilgerfahrt. op. 112”（1852）の表題頁は大型図版(s. 231，285)。また初期のピアノ曲でも《パガニーニのカプリースによる練習曲集》op. 3（1832）の場合は，各曲の説明と予備練習譜例入り序文の一部が図版になっていて，ピアノという楽器に対する彼の執着のほどを知る事が出来る（s. 108)。歌曲は，《リーダークライス》op. 24（1840）と op. 39 (1842),《女の愛と生涯》op. 42(1843)，《詩人の恋》op. 48（1844）の表題頁がまとめて1頁に収められ（s. 187)，殊に結婚式前夜にクララに贈られた《ミルテの花》op. 25（1840）金文字・彩色石版刷りの表題頁カラー図版は，素晴しい（s. 192)。この様な初版楽譜図版にはシューマン以外のものも数多いが，いずれにせよ，表題頁その他に見られる次の様な作曲家直筆の書込みは，世紀の児たちの交友関係を知る上で見逃せない：—

“À mon bien bon Chopin FL”〔リスト：ピアノ用編曲ベルリオーズ《幻想交響曲》(1834）表題頁に，s. 139〕

“F Chopin a son ami Schumann, Leipsic 1836”〔ショパン《バラード第1番》op. 23（1836）表題頁に，初公開，s. 151〕

“An F. Liszt……R. Schumann”及び“Sehr langsam”〔シューマン《子供の情景》op. 15（1839）表題頁と第13曲「詩人は語る」冒頭に，初公開，s. 164 f.〕

“An Franz Liszt / R. Schumann”〔シューマン《交響曲第3番「ライン」》op. 97（1851）表題頁に，s. 269〕

解説によれば，上記《子供の情景》は出版されたばかりの見本。これをシューマンは出版社ハスリンガー宛書簡（1839/3/19日付）に同封し，その前に出版されていた《クライスレリアーナ》op. 16（1838）を加えてリストに手渡すよう，頼んでいるとの事。

演奏会プログラムは，最初にツヴィッカウ中・高校時代にシューマンを中心に催されていた音楽会のプログラム（友人の手書き，1821/10/21－1828/1/15日）が初公開図版になっている（s. 28, 30, 37 f., 42)。その後はクララの名を掲げたものが多く，初公開のものはないけれども，出演者にヴィーク父娘の名前と曲目にシューマンの未完成の交響曲第1楽章が見られるツヴィッカウ・ゲヴァントハウス演奏会（1832/11/18, s. 115)，“Concert der Madame Pleyel”と題されているヴィーン楽友協会ホール演奏会（1839/12/12, s. 182)，2台のピアノ用に編曲されてクララが共演したベリーニ《清教徒》のテーマによる連作変奏曲《ヘクサメロン》（リスト，タールベルク，ヘルツ，ピクシス，ツェルニー，ショパン共作）が最終曲目になっているライプチヒ・ゲヴァントハウス・ホールでのリスト演奏会（1841/12/13, s. 20－2)，シューマンの《ピアノ協奏曲》op. 54が初演されたドレスデンのザクセン・ホテル・ホールでのクララ演奏会（1845/12/4, s. 234)，ロベルトとクララが出演し，彼の第2交響曲とピアノ協奏曲が演奏されたツヴィッカウ音楽祭での演奏会（1847/7/10, s. 252）などは，目新しい。更にシューマン指揮によるデュッセルドルフ1850－53年の演奏会（通算28回）のプログラムをまとめて見る事も出来る（s. 278 f.)。

各種評論誌は，先ずL. レルシュタープ創刊の週刊誌“Iris im Gebiete der Tonkunst”（1830－41）とシューマン中・高校時代の恩師K. E. Richter発行週刊誌“Die Biene.”（1827－33）からの抜粋が図版になっている。解説によれば，リヒターはツヴィッカウ・マリア教会の聖職辞任後，政治上進歩的，自由主義的な週刊誌“Biene”を発行，1832年に市会議員，翌年に州会議員，そして“Biene”発禁後アメリカに亡命，1848年に

帰国した人。“Iris”からはシューマンの《アベッグ変奏曲》評（1832/2/24），《パピヨン》評（1832/5/25），《パガニーニ練習曲集》評（1833/1/4），《子供の情景》評（1839/8/9），“Biene”からは，前述ツヴィッカウ・ゲヴァントハウス演奏会評（1832/11/25）からヴィーク父娘出演とシューマンの交響曲に関する部分が抜粋され，すべて図版そのままでも読める（s. 106, 116, 178, 115）。シューマン創刊の“音楽新報”からは，創刊号（1834/4/3）とシューマン著述全集では省略されているベルリオーズ《幻想交響曲》評（1835/7/3）冒頭部分，ヴィーンでのリスト演奏会評（1838/4/27），シューマンの交響曲第2番とピアノ協奏曲がクララ共演で自演された前述ツヴィッカウ音楽祭評（1847/7/26）が取り上げられている（s. 128, 139, 166, 252）。その他，内容は既に邦訳にもなっているショパン《協奏曲》評，若きブラームスを絶賛した“Neue Bahnen”は大型図版（s. 144 f., 311）。

以上の様な図版や生涯欄の解説には，肝要な出来事の記述後，様々な研究書からの引用文が続く場合が多く，その文末には注が付されて出典と該当頁が明示され，読者を更なる参考書へと誘う。その様な注の総数は468。

加えて本書には折に触れ，“シューマンとシューベルト”（s. 52）その他，メンデルスゾーン，ショパン，リスト，ワーグナー，ブラームスとシューマンの関係を個別に取り扱った小論（s. 136, 142, 190, 212, 302）や“ピアニストとしてのシューマン”，同様に音楽文筆家，歌曲作曲家，指揮者としてのシューマンを論じたもの（s. 80, 138, 196, 298），また“シューマンと文学”，“シューマンの指のまひ”，“シューマンの病気”といったものがそう入され（s. 50, 104, 318），この場合は注の付いた引用文に加え，所々に相互参照指示（クロス・レファレンス）が目立ち，これが本書中の様々な図版や解説を有機的に結び付ける。この様なそう入論文は1頁に収まる程度の短いものではあるが，書簡，日記など記録文書の内容を厳密に取り扱い，主観を交えず要点を押えて簡潔にまとめられ，示唆に富んでいる：例えば“シューマンの病

気”では，一般に神経衰弱，聴覚・言語障害など病症については事細かに知られていても病因は不明？　のシューマンの病歴が，F. リヒアルツの患者日誌を資料として従来よりも一歩踏み込んで言及されている。また“シューマンとショパン”では，シューマンの日記や書簡に見られるショパンに関する部分が詳細に引用された後，シューマンの批評文“Ein Opus Ⅱ”を笑いものにしているとして一般に取り上げられるショパンの書簡（1831/12/12日付，ティテウス・ヴォィチュホフスキ宛）の内容が吟味され，この書簡中の“カッセル在のドイツ人から10頁もある評論がとどいた”云々のくだりは，シューマンとは関わりなく，そのドイツ人というのはF. ヴィーク，評論もシューマンとは別にヴィーク自身が書いたものである事が指摘され，件のこの部分をシューマンの批評文に対するショパンの感想と受取るのは“不当 Unzutreffend……”と強調されている。更に相互参照指示によってシューマンのショパン《ピアノ協奏曲》評（s. 144 f.），前述“シューマンへ”と署名されているショパン《バラード第1番》op. 23 初版表題頁及びシューマンがショパンに献呈した《クライスレリアーナ》op. 16とショパンがシューマンに献呈した《バラード第2番》op. 38 初版表題頁の並置（s. 151）が関連図版となって，シューマンとショパンの間柄の再考がうながされる。

この様な編集上の配慮を読み取り，注や相互参照指示に従って本書をひもといて行けば，次第にシューマンと彼の時代が彷彿として来るわけだが，編著者ブルガーは，序文で“……様々な図版は，結局はシューマンの全生涯の年代記を目に見える様にするためのものである。けれども私は，本書が図鑑“Bildbände”と見なされる時には不快感を覚える。画像記録（Bilddokumente）を収集し，それをそれ相応に配列する事は私の仕事のほんの一部分，と心得ていたのだから。”と述べ，ロベルト－シューマン－ハウス館長ゲルト・ナウハウス博士はじめシューマン新全集刊行監修者前田昭雄教授とK. W. ニーメラー博士を含む10名の研究家の氏名を列記して謝意を表している。実際この書は，現存する多くのシューマン研究家の

協力を得ながらの仕事であって，生涯，図版の解説，そう入論文などの在り方からしても単なる分厚い大型図鑑ではなく，シューマンの実像に出来るだけ迫ろうとする総合研究資料集と言える。

特に演奏中は精神的に一種の霊媒とも言える19世紀ヨーロッパ音楽関係の演奏家にとっては，これは前2冊と共に座右の書となる性質のものである。次回は「メンデルスゾーン特集」が望まれる。

以上（2000年12月17日提出）。